

ダニエルの書 - 第三百十八番

ダニエル書11章を解き明かす：歴史をたどる預言の旅

Jeff Pippenger

2024-03-15

ダニエル書十一章四十節は、神の御言葉のうちでも最も深遠な節の一つを表している。そこに示されている預言的な歴史は、エゼキエルの幻の「車輪の中に車輪」が一つに結び合わされるところである。1798年のミラー派運動の終わりの時と、1989年の第三天使の運動の終わりの時によって、終わりの時代の神の民の内的歴史と外的歴史が描かれている。この節には、1798年に第一天使とともにもたらされた迫り来る裁きの宣告が含まれており、それは四十一節の日曜法に至るまで続く。ゆえにこの節は、神の教会における調査審判を表しており、それは死者から始まり、十四万四千人の封印に至るまで続き、そして神がラオデキア的アドベンチズムを御口から吐き出されることに及ぶ。

1798年に教皇権が致命的な傷を受け、四十一節でその致命的な傷が癒やされるまでの歴史は、その節が描く歴史の中に示されている。四十一節以降は、その節から始まる神の執行的な裁きが強まっていくという文脈の中に置かれている。この予言的な意味では、四十節はダニエル書十一章の終わりであり、その章の一節と二節が始まりである。第十一章は反キリストの反逆を描き、第十章はヒデケル川の幻の始まりを表し、第十二章はその終わりを表す。第十章と第十二章は初めと終わりを表し、第十一章は中間の反逆である。

第十章と第十二章は同じである。というのも、第十一章と異なり、それらはその幻に関するダニエルの体験を表しており、第十一章こそがその幻そのものである。第十章はヘブライ文字の第一の文字、第十一章はヘブライ文字の反逆的な第十三番目の文字、第十二章はアルファベットの最後の文字である。ヒデケル川の幻は「真理」である。

第十一章では、始まりが終わりを示している。キリストは決して変わらないからである。四十節に示されている終末の歴史は、獣の像に関する試練の時である。その試練の時は、四十一節に示されている獣の刻印をもって終結する。ゆえに、一節と二節は十四万四千人の封印の時を扱っていなければならない。というのも、その期間はまた、獣の像の形成の時期でもあるからである。

主は私に、猶予期間が終わる前に獣の像が形成されることを、はっきりとお示しになった。というのも、それが神の民に対する大いなる試練となり、それによって彼らの永遠の運命が定められるからである。……

「これは、神の民が封印される前に受けなければならない試験である。」『Manuscript Releases』第15巻、15頁。

いつも、終わりの時を示す二つの道標がある。モーセの改革運動では、それはアロンの誕生であり、その三年後にモーセの誕生が続いた。バビロンから出て神殿を再建する改革運動では、ダリウス王に続いてキュロス王であった。キリストの改革運動では、それはバプテスマのヨハネの誕生であり、六か月後にキリストの誕生が続いた。ミラー派の改革運動では、1798年の教皇制度の死に続いて、1799年のローマ教皇の死であった。第三天使の改

革運動では、1989年を共に示したレーガン大統領と初代ブッシュ大統領であった。ダニエル書10章1節では、キュロス王が示されている。

ペルシアの王クロスの第三年に、ダニエル、すなわち名をベルテシャザルと呼ばれた者に、一つの事が示された。その事は真実であったが、その定められた期間は長かった。彼はその事を理解し、幻を悟った。ダニエル書 10:1.

第十章の続く節々では、第十一章でガブリエルが預言の歴史の幻を伝えるに先立って、ダニエルの経験が描かれている。キュロスは終わりの時を画する。というのも、以前、ダレイオスの甥であるキュロスは、ダレイオスの將軍としてベルシャツアルを討ち、こうして七十年の捕囚の終わりを画したからである。この七十年の捕囚は、538年から1798年に至る、靈的バビロンにおける靈的イスラエルの1260年の捕囚を象徴していた。

「地上の神の教会は、この長く容赦のない迫害の期間中、捕囚の期間にイスラエルの子らがバビロンで囚われていたのと同様に、まさしく捕囚の状態に置かれていた。」
『預言者と王たち』714ページ。

1798年に千二百六十年の期間が終わったことは、「終わりの時」を画した。したがって、七十年の終わりも、その歴史にとっての「終わりの時」を画した。ベルシャザルの死とバビロン王国の終焉の場面には、ダレイオスとキュロスの双方が現れている。というのも、ダレイオスの將軍としてその働きを成し遂げたキュロスが、ダレイオスを代表していたからである。1989年1月20日にジョージ・H・W・ブッシュが就任したとき、1989年の最初の19日間はロナルド・レーガンが大統領であった。

ヒデケルの幻は終わりの時、キュロスの第三年に始まった。ガブリエルがダニエルに第十一章の預言的歴史を解き明かし始めるとき、彼はまずダリウスの第一年に言及し、彼がダニエルに提示しようとしていた預言的歴史の幻が、終わりの時の最後の時、すなわち1989年に始まることを明確に示す。なぜなら、すべての預言者は、自分たちの生きた時代よりも終わりの日々についてより多く語っているからである。

しかし、私は真理の書に記されていることをあなたに示そう。この事において私と共に立つ者は、あなたがたの君ミカエルのほかにはいない。さらに、メディア人ダリウスの第一年に、私自身も彼を確かなものとし、強めるために立った。ダニエル書 10:21、11:1.

ダリウスの第一年、すなわち1989年の終わりの時を表す年に、ガブリエルは「立った」。これによって、「終わりの時」には天使が到来することが示される。1798年には第一の天使が到来し、1989年には第三の天使が到来した。第三の天使のメッセージが2001年に強められるまで、第三の天使の封印は始まらなかったが、1989年に第三の天使が到来するという運動は、終わりの時にガブリエルが立つことによって表されている。ガブリエルはダニエルに「真理の書に記されたもの」を示そうとしており、ヒデケルの幻は、ガブリエルがこれから示そうとしている「真理」のしるしを帯びている。

第十章十四節でガブリエルは、ヒデケルの幻で彼が述べていることが「終わりの日に神の民に起こること」であると、すでにダニエルに告げていた。

今、私は、後の日にあなたの民に何が起こるかをあなたに悟らせるために来た。というのも、この幻はなお多くの日の後のことに関わるからである。ダニエル書 10:14

ダニエル書11章2節は、1989年に封印が解かれた「終わりの時」の知識を表しており、「終わりの日」に神の民に「降りかかること」が何であるかを明らかにしている。

今、あなたに真理を示そう。見よ、なおペルシヤには三人の王が起こり、第四の者は彼らすべてよりはるかに富む者となる。彼はその富による力をもって、すべての者をギリシアの国に敵対するよう奮い立たせるであろう。ダニエル書 11:2

キュロスは、1989年以降の第二の王を予表している。彼はメディアとペルシアの帝国の王であり、それは終わりの時における聖書の預言において、メディア人とペルシア人によって表される二本の角から成る王国を象徴している。1989年の終わりの時における二本の角を持つ地の獣の王国の第二の王の後には、なお三人の王（クリントン、後のブッシュ、オバマ）が現れ、そのうち、彼らすべてよりもはるかに富んだ王が現れる。最初のブッシュに続いた三人の王は、大統領職を退いた後に裕福になったが、それは彼らが大統領になったがゆえであった。第四の者で、はるかに富んでおり、史上最も裕福な大統領であったトランプは、大統領であったから金を得たのではなく、主として不動産投資の事業によって、彼が大統領に立候補するはるか以前に財を築いていた。

かつて、相対的に見れば、アメリカ合衆国史上最も裕福な大統領は、同国の初代大統領だった。ドナルド・トランプ以前は、ジョージ・ワシントンがアメリカ合衆国史上で最も裕福な大統領であり、彼はトランプと同様に、不動産投資によって財を成した。ワシントンもトランプも、伝統的ではない政治的背景から大統領職に就いた。ワシントンは大統領になる前は主として軍の指導者であり、トランプは実業家でテレビのパーソナリティで、ワシントンと同様にそれ以前の政治経験はなかった。

両大統領は強い個性とリーダーシップのスタイルで知られていたが、これらの特性の現れ方は大きく異なっていた。ワシントンは独立戦争と建国初期において、ストイックで冷静かつ自信に満ちたリーダーシップと、人々をまとめ上げる存在感で知られていた一方、トランプはリーダーシップと統治に対する強気のアプローチで知られている。ワシントンとトランプはいずれも大きな論争の的となる人物だったが、その理由はまったく異なっていた。ワシントンは広く尊敬されていた一方で、奴隷制に対する見解を含むさまざまな問題について、当時から批判に直面していた。トランプの大統領任期は、ソーシャルメディアでの「辛辣なツイート」の使用、アメリカ・ファーストの政策決定、そして彼自身の自己認識など、数多くの論争によって特徴づけられた。

最も裕福で、第六の大統領は、グローバルリストの竜の勢力を煽り立てることになっていた。第十一章第二節の歴史を、1776年、1789年、そして1798年の時期の歴史に重ね合わせると、イエスは初めをもって終わりを示されるので、地の獣の最後の大統領に言及するさらなる情報が見出される。1776年と1789年に代表される最初の二つの時期は、最後の大統領が、七人のうちの者であった第八の大統領となることを示す二人の証人を提供する。トランプはレーガンの後の六番目の大統領であり、第八の大統領として、彼は「七人のうちの一人」となるだろう。最後の、すなわち第八の大統領は、アメリカ合衆国が獣への、そして獣の「像」を造るときに支配する。

アメリカ合衆国によって獣の像が形成される時に在位している大統領は、ペイトン・ランドルフとジョン・ハンコックが証言しているとおおり、七に属する第八でなければならない。教皇制は、七に属する第八の頭であり、預言的な致命傷を受けた。教皇制の像であるためには、七に属する第八の大統領もまた、預言上「傷を負う」あるいは「殺される」という特徴によって識別されている必要がある。

教皇権は、竜の権力（フランス）によって致命的な傷を負った。その竜の権力とは、パウロが「不法の奥義（罪の人）」が当時すでに働いていると指摘した時代から、教皇権が闘ってきた相手である。異教の竜は、教皇権が王座に就くのを抑えていたが、教皇権は538年にそれを果たした。

教皇権は、その始まりから最終的な滅亡に至るまで、竜の勢力と戦い続ける。教皇権の像であるなら、その像も竜の勢力と戦わなければならない。黙示録17章では、教皇権は第八の頭、すなわち七つの頭に属する者として、最終的に火で焼かれ、その肉は十人の王たちに食い尽くされる。両方の死（1798年と終わりの時）において、教皇権という獣は竜の勢力によって殺される。アメリカ合衆国が獣の像を形成するためには、第八代大統領もまた、米国が交戦していた竜の勢力によって殺される必要がある。そして、1989年の時の終わり以後の第六の王は、すべての竜の勢力を煽り立てた王である。

ロナルド・レーガンは棄教したプロテスタントだったが、初代ジョージ・ブッシュは典型的なグローバリストだった。彼の有名な発言の一つは、1988年8月18日に次のように言って嘘をついたときのものだ。「そして、私は増税はしません。私の対立候補は今、増税は最後の手段、あるいは第三の手段だと言っています。しかし政治家がそんな話し方をするとき、それが彼の頼る手段になると分かるものです。私の対立候補は増税を排除しないでしょ。しかし私は排除します。そして議会は私に増税を迫るでしょうが、私はノーと言います。彼らは迫り、私はノーと言い、また迫ってくるでしょう。そして私が彼らに言えるのはただ一つ。よく聞いてください。新税はありません。」

龍の勢力の代表者に特有の、その公然の嘘は別として、彼の最も有名な言葉は1990年9月11日の米連邦議会上下両院合同会議でのものだ。彼はこう述べた。「いま、新しい世界が姿を現しつつある。新たな世界秩序の極めて現実的な見通しがある世界だ。ウィンストン・チャーチルの言葉を借りれば、『正義とフェアプレーの原則が... 強者に対して弱者を守る...』ような『世界秩序』である。冷戦の膠着状態から解き放たれた国際連合が、その創設者たちの歴史的な構想を実現する態勢にある世界だ。」父ブッシュは、共和党員だと自認していたにせよ、グローバリストだった。

ビル・クリントンは就任式をリンカーン記念堂で行った最初の大統領であり、つまり彼はリンカーンに背を向け、ワシントン記念塔のオベリスク、内部がフリーメイソンの象徴で満たされているそのオベリスクの方を向いたということである。彼が憲法への忠誠を偽って誓う際に向き合うことを選んだそのオベリスクとフリーメイソンの象徴は、彼が奴隷制反対の象徴であるリンカーン記念堂に背を向けたことを示すだけでなく、クリントンが選んだその歴史的な立ち位置が、彼が通っていたイエズス会の大学で師事した教授を称賛した受諾演説とも符合していることをも表していた。

その教授、キャロル・クイグリーは『Tragedy and Hope: A History of the World in Our Time』という本を著し、1966年に出版された。その本は「グローバリストの理念の聖書」と正しくかつ広く理解されている。コーランがイスラム教にとってそうであるように、また、アルバート・パイクが著し1871年に刊行された『Morals and Dogma of the Ancient and Accepted Scottish Rite of Freemasonry』がフリーメイソンの秘教的教義についての最も包括的な論述と見なされているように、あるいは『The Book of Mormon』が末日聖徒にとってそうであるように、クイグリーの本はグローバリズム哲学の聖書である。クリントンがコーランのムハンマドを称賛したなら、あるいは『The Book of Mormon』のジョセフ・スミスを称賛したなら、たいていの人はそれが誰のことか分かっただろうし、アルバート・パイクが誰であるかを知っていた者もいただろう。だが、クイグリーを称賛したことが、彼自身のグローバリストのアジェンダと一致しており、エイブラハム・リンカーンが体現した原則を彼が退けていることとも合致しているのだと知っていた者は少なかった。

演説で、クリントンはこう述べた。「10代の頃、私はジョン・ケネディから市民としての責務への呼びかけを聞いた。そして、ジョージタウンの学生として、私はその呼びかけをキャロル・クイグリーという名の教授が明確にしてくれた。彼は私たちにこう言った。アメリカが歴史上最も偉大な国家であるのは、私たちの国民が常に二つのことを信じてきたからだ。すなわち、明日は今日より良くなり得るということ、そして、それを実現するのは私たち一人ひとりの個人的な道徳的責任だということだ。」キャロル・クイグリーの「アメリカを再び偉大にする」ための考えは、合衆国がその国家主権を国際連合に譲り渡すことだった。クリントンは民主党員で、グローバリストであり、ドラゴンの代表だった。

「この親にしてこの子あり」。ジョージ・ブッシュ（息子のほう）はグローバリストであり、父親と同様、自らを共和党員だと称するグローバリストだった。リンゴは木から遠くへは落ちない。聖書は修辭的にこう問いかけている。「二人は、互いに同意していなければ、一緒に歩めるだろうか」。ブッシュ（息子のほう）が誰と歩調を合わせていたのかを見るには、彼がビルとヒラリー・クリントンと共に成し遂げた数々の取り組みをたどってみればよい。

バラク・フセイン・オバマは、大統領に選出される直前の選挙集会で、アメリカ合衆国を根本的に変革することについての発言を行った。2008年10月30日、ミズーリ州コロンビアで、オバマは次のように述べた。「私たちは、アメリカ合衆国を根本的に変革するまであと5日だ。」この発言は、2008年の大統領選挙で中心的なテーマとなった「希望と変革」という、より広範なオバマのメッセージの一部であり、重要な政策改革と国の進むべき方向転換に取り組むという彼の決意を強調するものだった。彼が国を向かわせた方向は、グローバリズム、反白人、中絶推進、炭素系燃料への反対、反米・親グローバリズム、多様性・公平性・インクルージョン、批判的人種理論の虚偽の歴史、等々のドラゴンの政策であった。オバマは単なるコミュニティ・オーガナイザーではなかった。彼は当時も今も、ドラゴンの権力のグローバリスト・アジェンダの代表者である。

しかしトランプは、現代の典型的な政治家とは異なり、1989年以降の期間におけるほかの7人の大統領全員を合わせたよりも多くの公約を守った。彼はアメリカを再び偉大にす

ることに専心しており、その過程で、米国だけでなく世界全体においても、グローバリストの支配層を刺激した。

ジョー・バイデンが、また別のグローバリスト以外の何者かであることを示す証拠は一切ない。

カトリックの獣は竜の勢力と長期にわたる戦いを繰り広げ、アメリカ合衆国が教皇制の像を形づくる時に在任している大統領は、預言の必然として、竜の勢力と争うことになる。ドナルド・トランプを除けば、存命の大統領のうち誰も竜の勢力と戦おうとはしない。というのも、民主党は公然とグローバリスト（竜）であり、そして後者のジョージ・ブッシュも、父と同様に（名目上は共和党員だが、実際にはグローバリストの竜）だったからである。イエスは常に最初によって最後を示すからである。

次の記事でこの研究を続けます。

神の民には大いなる危機が迫っている。世界にもまた危機が迫っている。あらゆる時代を通じて最も重大な闘争が、今まさに私たちの目前に迫っている。預言の言葉の権威に基づいて四十年以上にわたり切迫していると宣言してきた出来事が、今や私たちの目の前で起こりつつある。すでに、良心の自由を制限する憲法改正の問題が、国の立法者たちに強く働きかけられている。日曜遵守を強制するという問題は、国家的な関心と重要性を帯びた問題となっている。私たちは、この運動の結果がどうなるかをよく知っている。だが、その事態に備える準備はできているだろうか。人々に迫る危険を警告するという、神が私たちに委ねられた務めを、私たちは忠実に果たしてきただろうか。

日曜遵守の強制を図るこの運動に携わっている者の中にさえ、この行為がもたらす結果に目がくらんでいる者が多くいる。彼らは、自分たちが宗教の自由に正面から敵対していることを見ていない。聖書の安息日が求めるところと、日曜日という制度が立脚している虚偽の基礎とを、いまだ理解したことの少ない者が多い。宗教立法を支持するいかなる動きも、実のところ、幾世紀にもわたり一貫して良心の自由と戦ってきた教皇制度への譲歩の行為である。日曜遵守が、いわゆるキリスト教的制度としてのその存在を「不法の秘密」に負っているのであり、その強制は、ローマ・カトリック主義のまさに礎石をなす原理を事実上是認することになる。わが国が、日曜法を制定するほどにその統治の原則を放棄するとき、プロテスタントはこの行為において教皇主義と手を結ぶことになる。それは、長らく再び専制支配に乗り出す機会を熱心にうかがってきた暴政に命を吹き込むにほかならない。

宗教立法の権限を行使する国家改革運動は、十分に発達すれば、過去の時代に横行してきたのと同じ不寛容と抑圧を示すだろう。当時、人間の評議会は神の特権を僭称し、その専制的な権力のもとで良心の自由を踏みにじった。彼らの指令に背く者には、投獄、流刑、そして死が科せられた。もし教皇制またはその原理が再び立法によって権力を得るなら、大衆の誤謬に迎合して良心と真理を犠牲にすることを拒む者たちに対して、迫害の火は再び燃え上がるだろう。この悪は今や実現の瀬戸際にある。

「神が私たちに前途の危険を示す光を与えてくださっているのに、それを人々に示すために力の限りを尽くすことを怠るなら、どうして神の御前に潔しとされて立つこと

ができるでしょうか. 彼らがこの重大な問題に、何の警告も受けずに直面するままにしておいて、私たちは満足していただけるでしょうか。」『Testimonies』第5巻、711、712.